

本当の「寄付」

青森県立青森高等学校 2年 吉崎 世奈

私は小さい頃から可愛いお洋服を着ておしゃれをすることがとても大好きでした。洋服屋に行く度に新しい洋服を買い、クローゼットはいつも満杯でした。しかし身体の成長や洋服の好みの変化のために段々と着なくなる洋服が増えていきました。その洋服をどうしようか悩んでいた時に母があるチラシを持ってきてくれました。

「発展途上国の子供達にあなたの古着を寄付しませんか？」

私はこのチラシに飛びつきました。これなら私の不要な洋服を手放すことができるのに加えて、着る洋服に困っている子供達を私の古着によって助けることができると思い、私はすぐに発送をしました。当時の私にとってはそれが初めての寄付で、人の役に立つ行動をするのはこんなにも清々しいことなのかと感動したことを覚えています。

しかしながら、私は高校生でこの思い出深い清々しさを覆されました。その原因は学校の授業で見た、洋服の大量廃棄に関するドキュメンタリー映画でした。その映画の中で発展途上国へ送られる古着の描写がありました。カメラに映ったのは洋服とは言い難い、ボロボロの布が積み上がった山でした。まるでゴミ処理場のようでした。私はこのシーンが非常に衝撃的で今でも忘れられません。それらの古着は先進国から一方的に輸出されるだけされて、実際にはほとんど着られていませんでした。むしろこの古着によって現地の服飾業界が大打撃を受けており、さらには現地の環境にまで悪影響が出ていました。あのボロボロの古着の山の中に、私の古着が混ざっていると考えるとゾッとしてなりません。今思うと、当時は発展途上国の現状などを前調べせずに自分の利益を最優先して寄付をして、自己満足していました。

これを受けて私は今のファッション業界の在り方に疑問を抱きまし

た。現在、さまざまなファストファッション企業が誕生して消費者は手頃な値段でトレンドに合った洋服を手に入れることができます。ですが、その安さの背景には低賃金で労働者が働かされている現実が存在しています。洋服を作る人のコストを最小限に抑えて最大限に働かせて安価な洋服を大量生産し、それを低価格で消費者に提供して用済みになった洋服は「古着の寄付」と称して発展途上国へ丸投げしているのが現状です。これは個人の利益のみを優先している、非常に無責任な行動ではないでしょうか？私は誰かを犠牲にしてファッションを楽しんでいるという現実にとっても違和感を覚えています。

このような状況を打破するために、先進国の人々はフェアトレードや洋服のリサイクルを心がけ、一つの洋服を長く着るという習慣を身につけるべきであると思います。近年は洋服が簡単にしかも安価に手に入るので洋服に対する感謝の気持ちが薄れ、使い捨てが多くなっています。一人でも多くの方がこれらを実践することによって大量消費・大量廃棄される洋服を減らすことができます。

一連の経験を経て、私は世界中の人々に平等にファッションを提供したいという夢を抱いて、エシカルファッション・コスメブランドの設立を目的とする学生団体に所属しました。この団体の活動によって洋服の大量生産・大量廃棄という負のループを断ち切り、持続可能なファッションを築いていきたいと思います。